最終報告書

１．事業の概要

事業名	まるかじり気仙沼ガイドブック」復刻による記憶伝承と第二版出版のための調査研究を通じた内外の協働による復興まちづくり推進事業				
開始日	2012 年 8 月 1 日	終了日	2013 年 3 月 31 日	日数	243 日
団体名	スローフード気仙沼（任意団体）				

総額（税込）	3,500,000 円	スタッフ人数	5 人

事業目的	震災後の気仙沼市において、地域性にあった復興の方向性や外から見た気仙沼の地域資源の可能性を検証し、内外の協働によるまちづくりや産業振興を促進していくことを目的として、震災前の気仙沼の歴史・文化・自然を一冊にまとめあげた総合冊子「まるかじり気仙沼ガイドブック」の復刻と第二版発行に向けた調査研究を行う。本事業を通じて、市民的な意識の醸成を行い、同時に、現在気仙沼で活動している内外の支援関係者にも当圏域の成り立ちを知ってもらうツールとして活用する。また、震災後の気仙沼の調査研究では、自然や環境と調和した防災と安全の両立を目指す気仙沼の復興への歩みを記録し広く発信していくことで、持続的・創造的な復興まちづくりの一助とする。
事業全体の概要	●「スローフード気仙沼」とは 全国に先駆け「スローフード都市宣言」を行った気仙沼市は全国有数の漁港と豊かな自然を有し、豊富な水産資源をはじめ農作物などの食材にも恵まれており、こうしたかけがえのない風土やそこで培われた食文化を守り、次の世代に引き継いでいくことは、多様性を認め合う心豊かな人間性を育みながら自然と調和した住みよいまちづくりを推進していく上で、不可欠な要素となっている。 2003 年 7 月に設立された「スローフード気仙沼」は、同宣言の精神や理念に賛同し、「食」を中心としたさまざまな活動（イタリアでの魚食文化の発信、食が繋ぐ伝統芸能や産業文化の地域資源を掘り起こしたスローフードフェスティバルの開催、子供たち向けの地元食材を活かした料理コンテスト『プチシェフコンテスト』の年一回の開催、外部の料理専門家が気仙沼食材を活かした料理フォーラム『食のまちづくりフォーラム』の開催等々）に参画し、その実施・運営に積極的に関与してきた。中でも、地域文化伝承を目的とした「まるかじり気仙沼ガイドブック」の作成（平成 19 年）にあたっては、市内の小中学生約 4,000 名に無料配布、その他 3,000 部（1 冊 500 円）を市内だけで完売するなど高い評価を得た。 震災後も、個々の会員メンバー（年会費 10,000 円で現在は 68 名が所属）が気仙沼市震災復興会議委員や気仙沼市震災復興市民委員会委員として今後の地域づくり

	の委員として精力的な活動を続けている。また、外部専門家との各種会議を行い、今後の内外の協力体制の基礎づくりの役割も果たしている。本協働事業における「まるかじり気仙沼ガイドブック」を用いた震災以前の気仙沼の認知及び震災後の記憶伝承は、こうした大学関係者や支援団体さんとの協働のまちづくりを行っていく上でも、様々な分野で今後動きを起こす原動力となることが期待される。 ●「まるかじり気仙沼ガイドブック」（初版） 初版は、平成 19 年に、中小企業庁・地域資源∞全国展開プロジェクト（小規模事業者新事業全国展開支援事業補助金）による費用負担で発行された。事業費総額は、2,080,000 円で、リアス・アーク美術館の学芸係長であり、当該団体の理事でもある山内宏泰氏が編集責任者としてデータを作成し、三陸印刷株式会社（気仙沼市）から出版。著作権は、発行元である気仙沼商工会議所に帰属するが、本事業では、当該団体との間で書面により正式に復刻依頼や許可の承諾を交わす。 ●取り組むべき課題 震災後の気仙沼においても、単に新しい発想のみの地域づくりを展開するのではなく、これまで築いてきた気仙沼の自然、歴史、文化、産業の在り方を踏まえた復興のまちづくりを全体のコンセンサスを持って進めていくことが復興の重要課題となっている。それ故、現在体力的に弱っている地元の地域づくり団体が、外部の視点から見た気仙沼の魅力や地域資源の素晴らしさに気づき、今一度立ちあがろうという気運が生まれるような内外の協働にまちづくりを進めていくことが必要であると考えられる。そのためのツールとしての「まるかじり気仙沼ガイドブック」の復刻と再活用を図り、また次版発行へ向けた調査研究や勉強会の開催、その成果の広く市民へ向けた広報・発信を通じて、上記の課題に取り組む体制を整えたいと考えている。 ●パートナー協働プログラム対象事業 ①　震災の記憶の伝承としての「まるかじり気仙沼ガイドブック」復刻事業 • 震災以前の気仙沼の認知及び震災後の記憶伝承のための、初版（震災前）復刻（H24 年 9 月中旬を予定） • 復刻の意図や意義の説明のための山内主任学芸員による寄稿 • ガイドブックを活用した震災復興の在り方の各種検討

	②震災～復旧・復興期の気仙沼の記憶、地域資源の調査研究 • スローフード気仙沼会員及び支援団体の協働による震災後も持続的に存在する地域資源の掘り起こしと、震災後の暮らしの情報の集積化を図るための調査研究を行う。本調査研究は、今後の改訂版を作る際の基礎資料、及び復旧期の気仙沼の現状を把握するための調査にあたる。 • 早稲田大学の観光ボランティア班と連携し、震災後も営業を続ける飲食店のフィールド調査を行い、観光マップを含めた「まるかじり」別冊として、H25 年 1～2 月の発行を目指す。 • 気仙沼ならではの海の景観や自然環境を守りながら、防災や安全が両立できるような復興まちづくりを目指すための勉強会の開催（8 月～9 月にかけて全 10 回開催、成果は随時 HP 等で広く発信し、取りまとめた結果を「まるかじり」第二版にも掲載予定） ③広報・発信・プロモーション事業 • 大学研究者、民俗研究者、NPO・NGO、気仙沼市内まちづくり団体での記憶伝承活動における活用促進 • 調査研究や勉強会のアウトプットを広く市民に発信するための関連 HP の整備（※協働事業対象期間中の「まるかじり」第二版発行は困難であると予想されるため、こちらはリアルタイムで生きた情報をアウトプットとして発信することを念頭に置く。） • 市内各飲食店の連携促進を目指す「気仙沼えびすプロジェクト」（※「え」は旧字体）と称した地域の観光資源 PR 活動との連携 <u>●期待される効果</u> 本ガイドブックは、奥尻島や、神戸、そして東日本大震災により被害を受けた他の被災地とは異なる、気仙沼ならではの独自性を持った復興の在り方を検討していくための資料価値が非常に高く、その復刻後に、産業復興、暮らしの復興を遂げていくプロセスの中で、各種の地域文化や伝統に基づいた復興活動を起こしていくためのツールとして市民の復興へ向けた一体感を醸成することが期待される。 また、震災で多くのものが失われた一方で、地域にとっての財産である市民としての誇りや地域愛をもう一度育んでいく過程において、本ガイドブック活用を通じた意識の醸成や、震災後の気仙沼の調査研究事業とその成果の広く市民に向けた発信は重要な意義を持つことが期待される。
事業内容	①コンポーネント　震災前の記憶伝承のための「まるかじり気仙沼ガイドブック」復刻事業 • 震災以前の気仙沼の認知及び震災後の記憶伝承のための、初版（震災前）復刻 • 復刻の意図や意義の説明のための山内主任学芸員による寄稿 • ガイドブックを活用した震災復興の在り方の各種検討

	② コンポーネント　震災～復旧・復興期の気仙沼の記憶、地域資源の調査研究 • スローフード気仙沼会員及び支援団体の協働による震災後も持続的に存在する地域資源の掘り起こしと、震災後の暮らしの情報の集積化を図るための調査研究を行う。本調査研究は、今後の本の改訂版を作る際の基礎資料、及び復旧期の気仙沼の現状を把握するための調査にあたる。 • 早稲田大学の観光ボランティア班と連携し、震災後も営業を続ける飲食店のフィールド調査を行い、観光マップを含めた「まるかじり」別冊として、H25 年 1～2 月の発行を目指す。 • 自然との調和や景観を考慮した防災対策検討のための勉強会の開催（8 月～9 月にかけて全 10 回開催、成果は随時 HP 等で広く発信し、取りまとめた結果を「まるかじり」第二版にも掲載予定）
	③ コンポーネント　同ガイドブック活用を通じた広報・発信・プロモーション事業 • 大学研究者、民俗研究者、NPO・NGO、気仙沼市内まちづくり団体での記憶伝承活動における活用促進 • 調査研究や勉強会のアウトプットを広く市民に発信するための関連 HP の整備（※協働事業対象期間中の「まるかじり」第二版発行は困難であると予想されるため、こちらはリアルタイムで生きた情報をアウトプットとして発信することを念頭に置く。） • 市内各飲食店の連携促進を目指す「気仙沼えびすプロジェクト」（※「え」は旧字体）と称した地域の観光資源 PR 活動との連携

２．事業の評価（評価者：　寺垣ゆりや／株式会社アンジェロセック）

最終評価実施日：2013 年 6 月 7 日（金）

（a）妥当性：事業開始当時の状況やニーズに合致していたか、事業実施のタイミングはよかったか

「まるかじり気仙沼ガイドブック」復刻については、支援団体、研究者、報道機関関係者等など、それぞれの業務や立場から、異なる理由で復刻版の要望が多く挙がっていたことから、関係者の間でのニーズは高かったといえる。また、海岸地域コミュニティの高台集団移転など、自分たちの住む地域や環境について改めて考え直すタイミングに、気仙沼の歴史、文化等を詳しく説明した同ガイドブックが再版されたことにより、住民の方々がこれからの気仙沼像を再考する新たなきっかけを提供する機会ともなったといえる。

（b）有効性：目的の達成率

【コンポーネント①】

予定より 2 ヵ月遅れたものの、予定通りの 4,000 部を印刷し、図書館、市内の小中学校等 41 か所に配布した。またガイドブックを活用した震災復興の在り方について、バスガイドによる活用、学校教育の副読本、などの検討を行った。

【コンポーネント② 】

「まるかじり別冊」としての飲食店情報は、64 店舗の調査を行い、冊子ではなくウェブ上で掲載する形式で実施。「地域資源の掘り起し」については、「気仙沼ゑびすプロジェクト」として飲食店をはじめとする商店が、同じキャンペーンを介して、業種を超えて地域づくりに参画する活動を展開した。6 月 1 日現在で 56 店舗が加盟している。防災対策検討のための勉強会は予定より多い計 13 回開催され、毎回 150 名程度の参加があった。

【コンポーネント③ 】

発行したガイドブックの配布、ウェブ上の飲食店情報や勉強会 HP を通じた情報発信やコミュニケーション(意見交換)の場の提供を行うことなどで、様々な団体・組織、個人に対する広報やプロモーションを実施した。

（c）効率性：インプットに対してアウトプットがどれくらいあったか、手法は正しかったか

ガイドブック復刻版作成、まるかじり別冊に関しては、投入に対し適切なアウトプットが達成されている。ゑびすプロジェクト及び勉強会の広告掲載料については、プロジェクトへの参加加盟店や、キャンペーン応募者、勉強会への出席者数から判断すると、十分に効果のある投入であったと言える。一方で、本事業に中心的に関わる人員が、活動内容や量に対し十分ではなく、一人にかかる負担が大きく、組織体制について再考が必要であると思われる。

（d）調整の度合：いかに被災地コミュニティと連携できていたか、終了時のタイミングや方法はどうだったか

地元の有志による、震災以前からの活動を基盤に行っている取り組みであり、地域の事を深く理解し、適切な連携の上に成り立った事業である。事業内で実施された各種の活動は、本事業期間内で終了するものでは無く、これからも様々な形で継続実施されていくことを期待する。

ガイドブックについては、内容が濃く読み物的な要素の強い冊子であることから、閲覧という形式ではなく、より多くの人々の手元にわたることでよりその意図を伝えることが出来ると思われ、増刷する機会があれば検討するなど、活動の効果をより一層高める努力を期待したい。

（e）波及効果・インパクト：当初の目的以外に得られた効果、課題

まるかじりガイド、ゑびすプロジェクト、防潮堤を考える会、いずれの活動についても、プロアクティブな広報を含め、相当数のメディア露出がなされており、その注目度の高さや影響力の大きさが伺われる。九州や関西方面の大学関係者からもガイドブックに対する問い合わせがあるなど、想定していなかった地域や団体からの反響があったことは、ガイドブックの内容や、震災前の気仙沼について書かれた復刻版を発行するという着眼点が注目された結果であると考える。

一方で、震災以前の気仙沼の情報を改めて冊子として発行することによる、復興まちづくりにおける効果や、ゑびすプロジェクトを通じた広報やプロモーション活動の効果を図ることは容易では無く、定性的な評価を行うには、なるべく多くの関係者や裨益者にヒアリングを実施する必要がある。

（f）新規性・独自性：新しいアイデアや工夫が取り入れられているか、他被災地のモデルとなり得る事業か

外部に向けた発信では無く、地域内の住民に向けた、意識改革、横の繋がり強化等に重点を置いた活動は、震災後の地域の復興に向けた各種事業のなかでは、ユニークな取り組みであると考える。防潮堤に関する勉強会についても、行政が決める政策に対し、（結果はどうであれ）自分たちで理解した上で、自分たちの考えを表明する、という発想が根底にあり、自分たちの住む地域の将来を人任せにしてはいけない、という強い思いが垣間見え、復興を目指す活動として、忘れてはならない本質が中心に据えられた事業であると考える。

一方で、気仙沼においてこれらの取組が進められている背景には、地域にいる自分たちが、地域の歴史や文化を理解し誇りを持つことが重要、という発想の下で作成されたガイドブックを始めとする、地域の有識者が名を連ねるスローフード気仙沼による震災以前からの活動があったことが基盤としてあることから、他地域においても同様の手法が望ましいかどうかについては、判断が難しいところであると考える。

３．評価者の所感

スローフード気仙沼は、震災以前より、気仙沼の文化や地域産業の掘り起し等を通じて地域の活性化に資する活動を実施してきており、本事業においてもその基本方針がぶれることなく活動が組まれている。外部に対する発信や PR を積極的に行うことで、復興に資する活動に繋げることよりも、地元民が気仙沼に対する誇りを持つことに重点を置いている点が、他の復興に向けた多くの活動との違いであり、興味深い。地域の復興に向けた事業というよりも、地域の活性化を目指す中長期的な取り組みであるという印象を持った。

地域内の人々が地域を大切に思う気持ちが強いからこそ、自分たちの手で自分たちの住む地域の将来を作っていくための活動に奔走している姿は、震災や津波による被害を受けた地域に対して、何らかの協力をしたいと考える外部からの人々にとっても、心強い仲間であるのではないかと考える。